

初期チベット論理学書の科段構成について

福田 洋 一

はじめに

本稿では、初期チベット論理学¹⁾の論理学概論書の科段構成²⁾を比較し、そこに見られる共通の傾向と相違や変化していった点を指摘し、チベット独自の論理学の形成過程を解明するための一助としたい³⁾。

現在、公刊されている文献の中で一番古いチベット論理学概論書はチャパ・チューキセンゲ (1109-1169) の『量・心の闇の除去』である。チャパは論理学書の翻訳と教育を通じてチベット論理学の形成に与ったと考えられるゴク・ロデンシェーラップ (1059-1109) の孫弟子であり、カダム派の論理学の伝統を担ったサンプ・ネウトク寺の第六代座主である。彼の著作は、近年他のカダム派系の諸文献とともに発見され、『カダム全集』の一部として 2008 年に影印出版された。現在刊行済みの『カダム全集』90 巻の中には 26 点ほどの論理学書が収録されている。そのうち、本稿ではチャパの『心の闇の除去』、ツルトウン・シヨンヌセンゲ⁴⁾の『量・般若灯論』、チュミクパ・センゲペル⁵⁾の『量七部論の要綱』、チョンデンリクペーレルディ (1227-1305)⁶⁾の『量七部論・莊巖の華』を取り上げる。

『カダム全集』には収録されていないが、他にカダム派系の論理学概論書として、ニンマ派のロンチェン・ラブジャムパ (1308-1363) に帰せられる『量の真実要綱』⁷⁾が活字版で出版されている。Kuijp (2003) によれば、著者をロンチェン・ラブジャムパに帰することはできず、写本の特徴や文献内に言及される人名などからサキャパンディタ (1182-1251、以下サパンと略称) 以前の著作と想定される。

次に宗派としてはカダム派に属さないが、有名なサパンの『量・正理蔵』をサンプ系論理学書の列に加えることができる。『正理蔵』はサンプ系の基本的な主張を批判しているが、その構成や使用している術語などはカダム派の論理学書と共通している⁸⁾。

1. サンプ系の論理学概論

カダム派の論理学書⁹⁾は(チョンデンリクレルのものを除いて)、細部の科段については一致しないが、ある水準まで細部を捨象していくと、いくつかの共通点を見出すことができる。

まずチャパの『心の闇の除去』の構成は、全体がA1「知一般の分類」(spyir blo tsam gyi dbye ba)とA2「特に量知の確定」(bye brag tu tshad ma'i blo gtan la dbab pa)とに分けられる。A1においては、三種の対象(gzung yul, zhen yul, 'jug yul)を元に二種類の知の分類体系が述べられる。量を論じるA2においては、まず、B1「量の定義」(mtshan nyid)¹⁰⁾を述べる前提としてC1「定義一般の確定」、続いてC2「量一般の定義」が述べられる。定義が述べられた後は、「量」であるとされる分類対象、すなわち現量と比量の説明となる。これらの基本的な構造は、以下に見るように、その後の論理学書にも踏襲される。このような構成はインドの仏教論理学の原典には見られないので、この『心の闇の除去』に見られる構成はチベット起源のものと言えるであろう。しかし、それを創始した人物が誰であるかは、より古い文献が伝わっていない現在、確定することはできない。少なくともチャパは、この科段の構成については何も議論せず、すでに成立している定型的な構成を踏襲しているように見える¹¹⁾。

次に著者不明の『量の真実要綱』の科段の大まかな構成を『心の闇の除去』と比較してみると、語句のレベルまで一致していることが分かる。以下、スラッシュの前がチャパ、後が『量の真実要綱』である。

A1: spyir blo tsam gyi dbye ba / spyi blo tsam gyis rab tu dbye ba

B1: gzung yul la ltos nas blo gsum du dbye ba / gzung yul du ltos nas blo'i rigs gsum du dbye ba

B2: gzung ba dang zhen pa'i yul gnyis ga la ltos nas blo bdun du dbye ba / gzung yul dang 'jug yul gnyis ka la ltos nas blo'i rigs rnam pa bdun du dbye ba

A2: bye brag tu tshad ma'i blo gtan la dbab pa / tshad ma'i blo bye brag tu gtan la dbab pa

B1: spyi'i mtshan nyid / tshad ma'i spyi'i mtshan nyid

C1: spyir mtshan nyid kyis mtshon bya mtshon pa'i tshul / spyir mtshan nyid tsam gyis mtshon bya mtshon pa'i tshul

(52) 初期チベット論理学書の科段構成について (福田)

C2: bye brag tu tshad ma'i mtshan nyid kyis nges par bya ba / bye brag tu tshad ma'i mtshan nyid ngos gzung ba

B2: rab tu dbye ba / tshad ma'i rab tu dbye ba

B3: mngon sum gtan la dbab pa / mngon sum bye brag tu phye ste gtan la dbab pa

B4: rjes dpag gtan la dbab pa / rjes su dpag pa bye brag tu phye ste gtan la dbab pa

C1: rjes dpag gi mtshan nyid / rjes dpag gi thun mong gi mtshan nyid

C2: gtan tshigs dang gtan tshig ltar snang bsam pa / zhar la he du dang zlog phyogs he du ltar snang gi rnam par dbye ba

C3: rtags kyi nus yul bsgrub bya'i rang bzhin / rtags kyi nus yul bsgrub bya'i rang bzhin

C4: bsgrub pa dang sun 'byin pa'i ngag gi dbye ba / sgrub pa dang sun 'byin pa'i ngag gi rnam par dbye ba

C5: ngag de thal 'gyur du dgod pa'i tshul / ngag de thal 'gyur du 'god pa'i tshul

唯一異なるのは、A1B2でチャパが zhen yul と記しているところを『量の真実要綱』では'jug yul としている点である¹²⁾。両者に特徴的なのは、A2B4の比量の箇所を5つに分ける点と、為他比量の最初のC3に rtags kyi nus yul という用語で所証 (bsgrub bya) を言い換えている点である。次のツルトウンの『般若灯論』と比較すると『量の真実要綱』は『心の闇の除去』に極めて忠実であると言える。本書にツルトウンへの言及がないことも、本書がツルトウンよりも前に書かれた文献である可能性を示唆する¹³⁾。一方、比量に関する部分がチャパに比べて多く、全体の半分以上を占める。これは、サパンの『正理蔵』を除くこれ以降の論理学書に共通の傾向である。

ツルトウンの『般若灯論』の科段¹⁴⁾も、全体が A1: spyir blo tsam gyi rab tu dbye ba と A2: blo de dag gi rnam par gzhas pa に分けられ、A2の大部分を量についての議論が占めている点は『心の闇の除去』や『量の真実要綱』と同様である。下位項目については、名称や構成などは異なるが、おおよそ論じられている内容は対応している。

2. サパンの『正理蔵』

サパンの『正理蔵』は全体が、A1「所知を一般的に決択する」(shes bya spyi ldog nas gtan la dbab pa) と A2「能知である量の自性を確定する」(shes byed tshad ma'i rang

bzhin nges par bya ba) に分かれる。サパン以前の論理学概論書では、A1 は知一般をタイトルとした科段であったが、『正理蔵』では A2 の能知の対象として A1 の所知が論じられるという科段構成となっている。しかし、A1 の下位項目は、B1: shes bya'i yul, B2: shes byed kyi blo, B3: blo des yul rtogs pa'i tshul となっているので、A1 の所知には、対象と知の両方が含まれていることになる。また、これまでの三文献でも、A1 の知一般の記述において、対象との関連で知の分類が述べられており、科段の見出しに違いはあるものの、対応関係は見られる¹⁵⁾。むしろ、『正理蔵』に特徴的なのは、B3 の「知が対象を認識する仕方」という項目下に C1: spyi bye brag, C2: sgrub pa (= snang ba) dang sel ba, C3: brjod bya dang rjod byed, C4: 'brel pa dang 'gal ba という、後のドゥラ文献でも初級・中級で扱われるテーマが詳細に論じられている点である。ただしそれはドゥラ文献におけるような技巧的なものではなく、『量評釈』等におけるダルマキールティの議論を再構成しようとするものであり、チベット論理学の概念形成の過程を知る上で重要な意味を持っている。

3. ナルタン寺の系統

チュミクパとチョンデンリクレルは、カダム派の中でもナルタン寺に関係の深い学僧である¹⁶⁾。論理学に関してはサンプ寺の系統を引いている(チュミクパはサンプで論理学を学び、チョンデンリクレルはチュミクパに論理学を学んでいる)。チュミクパの『量七部論の要綱』は、知一般を論じる A1 と特に量について論じる A2 に分けられている点はこれまでと同じだが、科段の見出しが A1: shes pa dang shes bya spyir gtan la dbab pa と A2: bye brag tu tshad ma dang gzhal bya gtan la dbab pa となっており、それぞれに知とその対象がセットで言及されている点が、科段としてはより整合性のとれたものとなっている。

一方、チョンデンリクレルの『七部論莊嚴の華』の構成は、それ以前のものに比べてやや整合性を欠いた印象を与える。全体は A1: shes byed kyi blo, A2: shes bya'i don, A3: shes pa'i 'bras bu に分かれる。特に A3 の「知の結果」は新たな科段の立て方である。A1 は実質的には量についての特論であり、これが最初に論じられるものは他にない。A2 の下は B1: blo dang yul, B2: mtshan nyid dang mtshan gzhi, B3: rdzas ldog, spyi bye brag, B4: 'brel pa dang 'gal ba, B5: brjod bya dang brjod byed, sgrub pa dang dgag pa, B6: gtan tshigs に分かれ、『正理蔵』と同様、論理学的諸概念が個別に論じられる。また、これまでの論理学書で量の定義の前に定義一般について詳論されていたものが A2B2 に移されたことにより、定義の議論の本来の意

(54) 初期チベット論理学書の科段構成について (福田)

味が失われている。さらに為自比量は、A1の量の下ではなく、A2B6: gtan tshigs で述べられる。為他比量もA1の下ではなく、A3: shes pa'i 'bras bu の下のB2: nges pa'i don brjod pas gzhan gyi don sgrub pa で論じられる。他の論理学書では、量は一箇所にとまとめられ、定義一般、量の定義、量の分類(各論)という構成で論じられてきたのと大きく異なる。

おわりに

以上、我々が現在知っている一番古いチベット論理学概論であるチャパの『心の闇の除去』からカダム派系の論理学概論5つ、サキャ派1つの科段の全体的な構造を比較してきた。個々の著作によって細かい異同はあるが、チョンデンリクレの『七部論莊嚴の華』を除くと、大きな構造は共通している。すなわち、全体が知一般あるいは対象一般に関する部分と、量そのものに関する部分とに分かれ、量に関する部分は概ねダルマキールティ由来の現量と比量とに相当する。一方、知一般・対象一般についての議論にはチベット論理学独自の構成が見られる。またサパンの『正理蔵』が論理的諸概念を並列に項目として取り上げ、ダルマキールティの『量評釈』に基づいて詳論したが、その後は、同様にこれらが個別の項目として並列に論じられはするが、記述は極めて簡略になっていく。初期のカダム派のものとゲルク派のものを比べると、サパンを結節点としながらゆっくりと時代が移り変わってきた印象を受ける。

もう一つチベット論理学書の特徴として、量に関する部分が全体の7、8割を占め、さらに比量が全体の半分以上を占めていることを指摘することができる。このことから、比量の重要性が際立っていることが分かる。

本稿は、科段の大まかな構成のみを比較したものであり、内容や下位項目に亘るまでの比較をするための準備に過ぎない。カダム派とサキャ派の相違は科段ではなく、その中に論じられている内容にある。たとえば、対象や知の分類については、カダム派は基本的には共通した立場に立つが、サパンはそれを痛烈に批判した。また、カダム派、サキャ派共に量の定義の前に量一般についての詳細な議論を展開するが、そのカダム派、サキャ派に見られる mtshan mtshon gzhi についての詳細な議論は、対論者との間の問答の応酬が幾重にも積み重なり、極めて錯綜した内容のものであり、カダム派内でも異論や異説が多々あったことを窺わせる。また、比量についての記述の比重はチャパを除いて非常に大きいですが、それがどのような構造になっているかを調べることで、初期チベット論理学での比量の

理解の枠組みを理解することもできるであろう。これらについては、今後の課題としたい。

- 1) 本稿ではカダム派の定義、サンプ寺の系統がカダム派に属するか否かなどの歴史的な事情は考慮せず、ゲルク派・サキヤ派以外の論理学書を全てカダム派の論理学書と称し、特にサンプに関係している著者のものをサンプ系の論理学書と呼称する。西沢 (2011b) 参照。
- 2) 本稿で付している科段記号は、実際の文献に即した正確な番号ではない。本論の前に序論の科段があったとしても、それは捨象して本論自体の最初の科段分けを A から始めている。本稿で言及している科段は全て西沢 (2011a) 他の西沢史仁氏の諸論文に掲載されているが、本稿では科段は極めて簡略化したものしか取り上げていないため、また個々の科段の評価は異なっている部分があるが一々を対比することは紙数の関係上できないので、個々の箇所への言及は割愛した。
- 3) 筆者は科学研究費補助金基盤研究 (C) 「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」の成果の一部として、カダム派のチベット論理学書の電子テキスト入力を進め、それに基づく KWIC 検索サイトも開設している (<http://tibetan-studies.net/tiblogsearch/>)。本稿もこの研究課題の成果の一部である。また本稿の前提となる基礎的な科段表についても同科研費のサイトで公開している (<http://tibetan-studies.net/tiblogic/>)。
- 4) チャパおよびその弟子のツァンナクパ・ツォンドゥセンゲ (gtsang nag pa brtson 'grus seng ge, ?-1195 以降: 年代に関しては Hugon (2004), p. vii, note 1 参照) に学び、後にサパンに論理学を教えた人物。
- 5) 西沢 (2011a, I, pp. 286-290) によれば、チュミクパに関しては歴史資料の情報に混乱が見られるようである。生没年は西沢 (2011a, I, p. 287) に従い、おおよそ 1200-1280 頃としておく。彼は次のナルタン大蔵経に関与したチョンデンリクレルの師の一人であり、後代の論理学書でもしばしば言及される。『カダム全集』には他に『量決択』の註釈が収録されている。いずれも手書き写本が二つずつ収録されているが、本稿では 45 巻収録のものを参照した。
- 6) 生没年は、西沢 (2011a, I, p. 258, 註 1035) による。
- 7) コロフォンに、ニンマ派の有名な学僧ロンチェン・ラブジャムパ (klong chen rab 'byams pa, 1308-1364) が著したと書かれているが、Kuijp (2003) の研究によると写本の特徴、言及される人物の年代などからサパン以前のものとして推定される。
- 8) サパンは、もともとツルトゥンに論理学を学んだ。後にインドから亡命してきたシャーキャシュリーバドラにインドの仏教論理学を直接学んでカダム派の独自の論理学思想を批判することになるが、論理学的概念の背景はカダム派のものである。Hugon (2004, pp. xii-xv) には、『般若灯論』と『正理蔵』の間に一致するフレーズの例がいくつか指摘されている。注 3 に挙げた KWIC 検索においても、『正理蔵』とカダム派の論理学書の語彙の傾向が一致していることが分かる。
- 9) 本稿を執筆するにあたって、チャパの『心の闇の除去』およびチュミクパの『量七部論の要綱』のテキストは、チベット人松下賀和氏 (元セラ寺ゲシェ) にテキストを入力していただいた。記して感謝を表したい。
- 10) mtshan nyid は普通「定義」と訳されるが、これは誤解を生みやすい訳語である。定

(56) 初期チベット論理学書の科段構成について (福田)

義は定義されるもの (mtshon bya) と対になる概念であるが、チベットではさらに mtshan gzhi を加えて、三項関係が念頭に置かれる。福田 (2003) 参照。ここで、定義されるものは「量」や「現量」などの概念であり、その概念が述定される対象になるものが mtshan gzhi である。量という概念の mtshan gzhi は現量と比量の二つである。mtshan gzhi はまた、その概念の「分類」(dbye ba) でもある。チベット論理学では、まず概念が挙げられ、その mtshan nyid が検討され、次にその概念によって述定される mtshan gzhi が「分類」(dbye ba) という科段のもとで論じられることが通例である。

- 11) 内容的には論争的なスタイルを採っているので、それ以前にかなりの議論が積み重ねられていたと思われる。
- 12) このことも含めて、初期チベット論理学における対象設定理論の相違については別稿に譲る。
- 13) Kuijp (2003, pp. 415–416) は、本書に言及される人名を列挙している。本書が “polemical treatise” (p. 415) と言われる所以である。ただし、言及されている人名の著作の多くは現在失われているので、本書における言及は、初期チベット論理学で行われていた議論を再構成するための貴重な資料であると言える。
- 14) Hugon (2003) 所収の科段に基づくが、番号は振り直している。
- 15) もちろん、サパンはカダム派の見解を批判してはいる。Kuijp (1987, chap. 2) および福田 (1989) 参照。
- 16) この二人の事績および思想的な立場については、西沢 (2011a, I, pp. 258–281, pp. 286–291) に詳しい。

〈一次文献〉

- チャパ・チューキセンゲ『量・心の闇の除去』*tshad ma yid kyi mun sel. phywa pa chos kyi seng+ge* (1109–1169). bka' gdams gsung 'bum 8, pp. 35–427.
- 著者不明『量の真実要綱』*tshad ma'i de kho na nyid bsdus pa*. 隆欽饒絳『隆欽巴邏輯学』四川民族出版社, 2000.
- ツルトウン・シヨンヌセンゲ『量・般若灯論』*tshad ma shes rab sgron ma. mtshur ston gzhon nu seng ge* (1150–1210 頃). In Hugon (2004).
- サキヤパンディタ『量・正理蔵』*tshad ma rigs pa'i gter rang 'grel. sa skya paN+Di ta kun dga' rgyal mtshan* (1182–1251). 薩迦班智達・貢噶堅贊等『量理宝蔵論』民族出版社, 1988.
- チュミクパ・センゲベル『量七部論の要綱』*tshad ma sde bdun gyi don phyogs gcig tu bsdus pa: gzhan gyi phyogs thams cad las rnam par rgyal ba. chu mig pa seng+ge dpal* (1200–1280). bka' gdams gsung 'bum 45, pp. 11–163. (Cf. bka' gdams gsung 'bum 87, pp. 315–448)
- チョンデンリクレル『量七部論・莊嚴の華』*tshad ma'i bstan bcos sde bdun gyi rgyan me tog. bcom ldan rigs pa'i ral gri* (1227–1305). 炯丹・日比熱直『因明七論莊嚴華積』中国蔵学出版社, 1991.

〈二次文献〉

- Hugon, Pascale, ed. 2004. *mTshur ston gzhon nu seng ge: Tshad ma shes rab sgron ma*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 60. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 2004.

van der Kuijp, Leonard W. J. 1987. *Contribution to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology: From the Eleventh to the Thirteenth Century*. Alt- und Neu-Indische Studien 26. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

———. 2003. “A Treatise on Buddhist Epistemology and Logic: Attributed to Klong Chen Rab 'Byams Pa (1308–1364) and Its Place in Indo-Tibetan Intellectual History.” *Journal of Indian Philosophy* 31: 381–437.

西沢史仁 2011a 「チベット仏教論理学の形成と展開：認識手段論の歴史的変遷を中心として」4巻，東京大学博士学位論文。

西沢史仁 2011b 「サンプ寺の帰属問題：サンプ寺はカダム派所属の寺院であるのか」『真宗総合研究所研究紀要』30: 33–52.

福田洋一 1989 「チャパ・チューキセンゲとサキャ・パンディタの対象設定の理論」『東方学』78: 140–127.

福田洋一 2003 「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西藏学会々報』49: 13–25.

(平成 26 年度～28 年度科研費基盤研究 (C) 26370059 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 チベット論理学, カダム派, 論理学要綱, チャパ, サパン

(大谷大学教授)

新刊紹介

望月 海慧 訳

全訳 アティシャ 菩提道灯論

A5 版・380 頁・本体価格 7,700 円
起心書房・2015 年 3 月